

さらに実践的には、三心、四修具足の称名であるが、法語に「源空が目には、三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏也。」とある如く、悉く南無阿弥陀仏に結歸することこそ、宗祖の選択本願念仏の本質そのものであらう。

覚鑒上人の浄土教について

佐 倉 郁 夫

鎌倉時代法然上人の浄土宗開宗以前の浄土教思想はどのような経過を以て展開していたか考察するに、一般的に三つの思想形態を見ることが出来る。即ち智光(AD七〇九)――、永観(AD一〇三三)――、珍海(AD一〇九二)――、一五二)等によつて代表される南都系浄土教、円仁(AD七九四)――八六四)――、空也(AD九〇三)――九七二)――、源信(AD九四二)――一〇一七)――、良忍(AD一〇七三)――一二三二)等の叡山系浄土教、或は通達進(AD一〇二五)――一二一五)――、覚鑒(AD一〇九五)――一二四三)実範(AD

一二四四)等の真言系浄土教がそれである。

この中で真言系浄土教の中で最も顕著である覚鑒上人の浄土教思想について究めたいと思う。

覚鑒は時代の状況を深く洞察して真言教義に即して浄土教思想を体系的に真言教学に受容したことは、天台宗に於ける源信と同様、後世に与えた影響は大きく、彼は密教の復興者であると共に法然、親鸞両師の一大先覚者であるとも云われている。覚鑒の著述に於て特に浄土教思想を述べたる著述としては「五輪九字明秘密釈」「阿弥陀秘釈」「一期大要秘密集」(何れも一卷)があり、これら何れも始終密教の意を以て浄土教を説明されており、その中でも「五輪九字明秘密釈」は最も代表的である。即ちこの著は一名を頓悟往生秘観とも云い既に題号に於て往生の意を顯わしており、この内容は真言浄土の融会を述べたる覚鑒の新主張であると共に、上人の晩年に著わされたことより覚鑒の成仏の体験事実記とも云うべき秘密念仏主義の大著である。更に一般仏教教理史から見れば聖道門より浄土門に移る架橋とも云われている。

覺饒の主張するところは、大日如來の三昧耶曼荼羅である五輪と、阿彌陀如來の眞言である九字とは同一であると説かれている。即ち毘盧彌陀は同体の異名、密嚴極樂は名異にして一処と大日と彌陀の信仰の一致を説き、大日の法体の上に彌陀の相を顯現しその功德により頓悟往生の大利益があると力説されている。又彌陀の小呪である九字を十門分別し、更には密教の淨土往生には四種の廻向を親因とすると述べている。この書は序分と正宗分と跋文とにより成立つてゐる。

以下覺饒の淨土教思想について彼の彌陀極樂觀、機根論について論じてゆく。

淨土教思想に於ける中心本尊は阿彌陀如來であるが、眞言密教に於ける中心本尊は大日如來であつて覺饒は兩者の關係を「五輪九字明秘釈」の序文に

毘盧彌陀同體異名、極樂密嚴名異一處、

と説かれている如く大日・彌陀の兩仏を同体の異名と平等視され、又密嚴淨土と極樂淨土は同一のものであるとされ、「一期大要秘密集」には

不離大日別有彌陀……彌陀者大日之智用、
大日者彌陀之理體、密嚴者極樂之總本、極樂者密嚴之別德

とあり、彌陀は大日如何を本体とし、彌陀は本体である大日の智なる一屬性的存在と表現され、極樂淨土も大日如來の淨土である密嚴淨土に包含されているもので、その密嚴淨土に往生することが最高の淨土であり、覺饒は密嚴淨土について「密嚴淨土略觀」に

夫密嚴淨土者、大日心王之蓮都、遍照法帝之金利、秘密莊嚴之往處、曼荼淨妙之境界、形體廣大、等同虛空、性相常往、超過法界、十方淨土為前栽、諸仏妙刹為後園、

と密嚴淨土を規定されている。次にこの密嚴淨土の所在は現實の娑婆世界を離れた異所に在るものではなく、衆生の往する當處こそ密嚴即極樂淨土であり、その淨土も觀念坐禪の如何なる修業によつても直に理饒され、其身そのまま彌陀即大日となつて即身成仏が可能になるのである。即ち密教の根本精神である凡夫即仏、娑婆即寂

光土の即身成仏義に立脚するものである。元來密教の大日信仰に於ては本体である大日（普門）を五仏に配した場合には、その中に阿彌陀仏（一門）も含まれており、彌陀を信仰し念仏を称えることは大日如來の仏果を得ることになり、現世に於て成仏するところに真言念仏（秘密念仏）の意義があり、顯教特に善導大師の説く指方立相の淨土觀とは根本的に相違するのである。

次に覺鑒淨土門的易行化への接近のあらわれとしての機根論について述べる。

先ず「五輪九字明秘密釈」の序文に

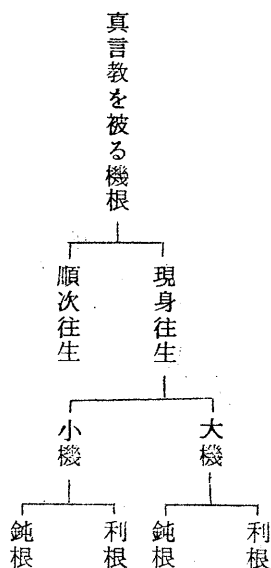
竊惟、二七曼荼羅者（そのうち九字曼荼羅は）弥陀世尊肝心……順次往生一道……弥陀善逝淨土、期於往生称名、

とあり、元來真言密教に於ては上根上智の者を以て正彼の機根とされていたのであるが、この典拠に於ては、上根上智以外の下根劣慧の者をも順次往生すべきであるという未來往生思想を認めることができ、しかも往生極樂の爲には称名念仏によるべきであると力説されて、機教

相應の覺鑒の新見解を窺うことが出来る。この新見解である機根論について「五論九字明秘密釈」に真言密教（あくまで覺鑒の新見解であり、以後新義真言所説の機根論となる。）に於ける機根の種類として

於此所化機總有二類、一現身往生、二順次往生、於現身門、又二別、一大機即身成仏、二小機即身成仏、又於二各有二、利鈍別故、

とあり、これを図示すると、



となり、現身往生、順次往生が密教の正統の機根であると認めたわけであるが、夫々について「五輪九字明秘密釈」に

問、依五輪門機有幾種、答有二種機、一上根上智期即身成仏、二但信行淺期順次往生、就此行者亦有多、正往生密嚴淨土、兼有期十方淨土

とあり、上根上智は即身成仏を期すべきであり、甚だ愚鈍劣機の但信行淺の者は未來順次の往生を願うべきであると述べられてゐる。ここに於て密教に於ては即身成仏を本願とするのであり、順次往生をも五輪門により可能であると説くと矛盾を感じるが、密教の法門は万機普益の總持の深教があるから現身・未來の何れの往生も可能であると云われている。先述した如く順次往生は大日普門の一門である弥陀信仰によるべきであるとされ、童樹・

護法は弥陀を信仰して極樂に往生した実例があると覺鐵は述べており、特に愚鈍劣機の者が専心に阿弥陀仏を念じ淨土往生を望むべきであると述べ、簡易な実践法によ

り極樂往生は間違いないと主張されている。この様に簡易な修業法を劣機の者に説示して、大日如來の信仰と同様とされていたが、次に「一期大要秘密集」に於ては、人生生涯に於ける最も肝心なことは臨終正念であつて、臨終に際して、称名念仏して極樂往生を願うならば、如何なる人々でも淨土に生れることが約束されるから、菩提を求め淨土往生を望む者は平素から心掛けねばならないと述べられて、あらゆる人々を救済の対象としており、この「一期大要秘密集」には外に臨終所説の日想観、或は無量寿經所説の才十八願等の説も窺え、密教の淨土往生の行に淨土教思想を著しく主張されている。

次に極樂往生を期する者は密教の実踐法殊に弥陀を専念するといふ簡易な行を修するにあたり、如何なる心行を具足しなければならぬかというところ「五輪九字明秘密釈」に

高仰大日悲願、深信弥陀本願、更以無往生異路、

と大日如來の悲願を仰ぎ、弥陀の本願（四十八願）を信

ると上品上生の極樂に生ずると信心為本の旨を述べ、続いて念密行の行人は四種の廻向、即ち四無量心廻向、衆生無辺誓願度廻向、興隆仏法廻向、法界平等利益廻向を親因とし、行因に於てはあらゆる諸行を往生の正因正業と認められている。

特に真言宗に於ては三密即ち身密、口密（語密）、意密の三密の妙行を修することが真言宗の実践法であり、覺鑒以前即ち古義所説では三密必具でなければならないと説くが、覺鑒は大日如來の一門一尊の一印一明一觀の一密によつて往生出来ると説き、一密について専心勵むと他の二密も自ずと相應し、三密を修したと同様の価値が得られるのであり、成仏（往生）が期待できるのである。覺鑒は愚鈍劣機の者に称名念仏により順次往生を願うべきであるとあつたが、この称名念仏も三密のうちの一つである語密であり、称名念仏に勵むと他の二密も自ずと相應して真言の法門を総て実践したことになり、念仏による修業方法を力説されたのである。

以上念密行者は四種の廻向を実践することを以て往生

の親因とされ、行因に於ても各人の機根に応じた行業を総て往生の正業とされ、特に大日如來の一門一尊である阿弥陀仏名を称えるという語密を中心とする易行道へと勧め、当時勃興期にある淨土教思想に呼応して一密往生説をたてられたのであると思える。

以上覺鑒上人の弥陀觀・極樂觀・機根論について要点を述べたのであるが、彼の思想は「五輪九字明秘密釈」の才十発起問答決疑門にある如く、「真言行者は南無阿弥陀仏の名号に於て浅略の想をなす事なかれ」と真言淨土の同一価値を究明し、この立場により大日即弥陀、密藏即極樂と弥陀觀、極樂觀を規定され、特に大日普門の一門である弥陀の信仰を強調し、此土に於て弥陀即大日となつて即身成仏をすべきであると力説された熱烈なる真言行者であつた。このように覺鑒は大日如來大悲の奥義を究め、専ら即身成仏の標榜に努められたのであるが、當時は他力往生の淨土思想が全国的に風靡しており、時代の勢は厭離穢土欣求淨土を願う衆生多く、人心の宗教的欲望を洞察して即身成仏以外に順次往生の主唱をさ

れ、當時自己の理性によりて即身成仏するに不可能な下根劣機の凡夫に対して未來往生の一道を提示された。又臨終正念主義については総て當時の淨土教家の主張するところで、當時の時代思想に呼応された必然の帰趣である。覺鑒はこの臨終正念主義を重要視すると同時に、實際は臨終に際して、五濁惡世のこの社会に於ては仏道修業をするについても差障りが多く臨終作法に励み難いので早くより仏道に覺めて、菩提を求め往生を願つて、平素より称名念仏を心掛けねばならないという文拠を見るに及び、覺鑒が愚鈍劣機の者をも往生の対象として勸信し、易修易行の一密の修業持に念仏について力説されたことと合せ考えると、後の鎌倉時代法然、親鸞の一先驅者といわれる所以もここにあると思える。

— 完 —

三 法印の研究

武 田 義 照

仏教とはもちろん釈尊の説かれた真実の道であるが、この仏教と外道とを区別するため古来より、三法印というものが説がれてきた。これは現在に於ては「諸行無常 諸法無我、涅槃寂靜」の三ヶ条とされている。しかし、古き經典をひもといてみると、法印の数、形は種々雑多である。そこでこの法印の変遷について述べねばなるまい。

先ずパーリ、ニカヤに於ては「相應部經典」等に最も原初的と考えられる五蘊の「無常・苦・無我」と説き次いで「比丘等よ、一切は無常なり。一切は苦なり。一切は無我なり。」（南伝五卷四六頁）と、釈尊が現實生活に於いて、先ず苦を觀じられ、苦は無常のために起り来ると悟られ、次いで無常であり苦であれば當然無我であると正覺された、そのままの形で三法印と表わしてい